ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

「へぇ、じゃあ、これロランが作ったんだ」

「美味しいですねぇ」

　その日の夕食の時間。食卓を囲み、俺達はクリームシチューを頬張っていた。そのクリームシチューに、レイと詠は舌鼓を打っていた。そりゃあそうだろう。途中から樹葉が手を加えたんだ。

「別に……俺が一人で作ったわけじゃない。途中からは手伝ってもらった。つーか、知らなかったよ。クリームシチューって、ルーを先に作ってから具材を煮込んじゃいけないんだな」

「えっ？　マジで？　私、いつもそうしてるんだけどっ？」

　ガタッと席を立って叫ぶレイに、樹葉は思わず苦笑して口を開く。詠は呆れ顔で俺とレイを交互に見た。

「うーん、だと思った。ロランがシチューやカレーをどうやって作っているのか見たら、多分レイちゃんもそうやって作っているんだろうなって……」

「なるほど、それで二人のシチューやカレーは、具材が硬かったんですね……」

「あれ？　うちら、今まで結構非常識な事を平然とやってたわけ？　ロラン、どうするよ？」

　あちゃー、という顔でレイは俺にそう聞くが、普通に今度から気をつければいいだけの話ではないのだろうか？

「てかさ、おかわりは無いわけ？　全然足りないんだけど？」

　見ると、既にレイの皿は空になっていた。いやはや、実に見事な食べっぷりと言わざるを得ない。作った方としては嬉しい限りなのだが……

「悪いな。作った分は、これで全部だ」

「えぇっ？　な……なんでっ？」

「いや……材料が思ったより無くてさ。全部使えば何とか足りるかなって思ったんだけど……大変申し訳ない」

「ガーン」

　そんな、世界の終わりを見ているような顔をしなくても。

「……で？」

　俺は、漆黒の空に浮かぶ月……ではなく、月に似た『フォルス』を見上げながら呟く。

「なんで、俺達はこんな所にいるんだ？　リーダー、説明頼む」

「いや……私に聞かないでよ」

　ブンブンと首を振るレイ。まぁ当然の反応だが、俺は今自分がここにいる理由を、誰かにそう聞かずにはいられなかった。

　おかわりが無いことをレイと揉めている最中、突然警報が鳴ったことは覚えている。その後、こっちへの出動命令のメールを見て驚いたことも、だ。

　基本的に、俺達が『トラース』に来るのは、多くて月に一回程度だ。別に『チーム』全体としてのルール的に回数制限があるわけでは無いのだが、俺は『ワルキューレ』に所属している『チーム』の一員であると共に、地球社会では職業は学生だ。学業への影響を考えて、『ワルキューレ』では原則として、学生が『トラース』に来るのは月二回まで、『研修所』あがりの新人は、外での生活に慣れるまで月一回までという決まりがある。俺はまだ新人の域を脱していないうえ、つい最近『トラース』には来たばかりだ。『原則』なので、勿論緊急事態の時はその限りでは無いのだろうが、それならそれで他に適任はいくらでもいる。

　何故俺達が？　という疑問が、俺の中にはあった。

　これでマルクスさんが近くにいるというのなら、まだ俺もこんな疑問は抱かなかったのだろう。『緊急事態』にも対応する訓練か何かだと思ったに違いない。だが、その肝心のマルクスさんはいないし、他に頼れそうな先輩もいない。今回任務を受けたのは、俺達だけなのだ。

　しかも、その任務がまた曲者で、とにかく至急『トラース』に行くよう命ぜられただけで、具体的にこっちで何をすればいいのか、何も書いていなかった。とは言え、俺は今まで『緊急事態』の任務を受けたことが無いので、こういうものだと言われれば、納得せざるを得ないのだが……やはり、不安――というより、怪訝だ。

「と……取り敢えず、落ち着きましょう。まずは現状の確認です」

「そ……そうだね。もしかしたら、抜き打ちの訓練か何かかもしれないし」

　詠と樹葉の言葉で、俺とレイも少し落ち着く。確かに、二人の言う通りかもしれない。周りを確認しようと、俺はカラコンを外す。

　今俺達が立っている場所は、この間『トラース』に来た時に出た所と同じ場所だ。『アップロード・メタル』が、どの『ダウンロード・メタル』に通じるようになっているのかは上の方々しか知らないので、二回連続で同じ場所に出てくることは中々レアなケースである。

「珍しいね。同じ所に出るなんてさ」

「この間と同じデータが来たんですね」

　同じことを思ったのか、レイと詠が首を傾げて話していた。俺達が使っている『アップロード・メタル』には、任務の度にレイのタブレットに『ワルキューレ』からデータが送られてきて、それを機械に読み込ませる、という手順で電流を流す。多分、電流の強さでどこに出るか決まるのだろうと俺は思っている。あのデータは、どのくらいの強さで電流を流すのか計算されたデータなのではないだろうか。最も、ここら辺は定かではないし、俺個人としてみれば、別にどうでもいいことなのだが。

　そんなことを一人で考えていた、その時だ。

「ねぇ……皆……！」

　今にも消え入りそうな樹葉の声が、俺達の耳にはっきりと届く。尋常でない事態だとすぐに察した俺達は、今樹葉が見ている方を一斉に見た。

　樹葉がそんな声を出した理由が、分かった。

「……」

　樹葉につられたのか、俺も言葉を失っていた。

「そ……そんな……」

　詠の掠れたような声が、小さく響く。

「あれは……トラブレの連中っ？」

　ただ一人、ちゃんと声が出せるレイがそう叫ぶ。

　争っている以上、物の見方や価値観は、現在二十を超える『チーム』でそれぞれ違う。だが、どんな『チーム』であれ、『トラース』を我が物にしたい、という考えは共通していると言える。これは、俺が『研修所』の外に出てから、『トラース』について一番最初に教えられたことである。この考えは当然だろう。『トラース』がいらないければ、わざわざ争う必要はない。闘っている以上、敵もこの認識は持っているものと見て間違っていないはずなのだ。

　だが唯一、例外が存在する。それがさっきレイが言った、トラブレという『チーム』だ。正式名称は『トラース・ブレイカー』。「『トラース』の破壊者」という意味である。古参の『チーム』ではあるものの、彼等は設立するとすぐに、『トラースを破壊する』という目的を公言し、当初から『トラース』に来た他の『チーム』を無差別に襲っていた。『ワルキューレ』では報告されていないが、殺された人もいる。襲われた『チーム』の中には、その時の恐怖から解散に至ったところもあるそうだ。

　ただ肝心の『トラース』の破壊に関しては、この空間について分かっていない事が多すぎるせいか、まだ具体的な活動はしていないらしい。精々、他の『チーム』が発見した資源を、根こそぎ奪い取って破棄するくらいである。

とは言え、勿論そんな『チーム』を放っては置けないので、何度か単体で、またはいくつかの『チーム』が合同してトラブレに攻撃をしかけたようだ。しかし、結果は全て失敗に終わり、返り討ちにあっていた。『チーム』が合同した時は、マルクスさんを始め、『ワルキューレ』のメンバーも何人か参加していたらしい。以前、闘いに負けた経験を、マルクスさんが悔しそうに語った事がある。丁度、訓練でマルクスさんにボコボコにされた時だったので、その話に俺は大きな衝撃を受けた。

　今、広大な草原の少し向こう側で、『ワルキューレ』に所属している調査員達数十人が逃げ惑っている。襲っているのは、四人の少女だった。遠目からだと少女くらいの年齢だということしか分からないが、全員種類は違えど、学校の制服のようなものを身につけている。色もバラバラだ。統一性の無いあの格好が、トラブレという『チーム』の目印である。

「私とロランは前線で突っ込んで行くから、樹葉は後方支援！　詠はいつも通りサポートお願い！」

　レイが素早く指示を飛ばす中、俺は既にカラコンをつけ、大地を蹴っていた。短く生えた雑草を踏み潰し、腰の『ヘルズ・ギア』を鞘ごと取ってそのまま振り、黒い刀身を露にする。少し遅れて、心地よいＢＧＭが頭の中を巡り始めた。

「この黒い刀身は、お前らの肉体を、痛みという名の冥府に堕とす」

　早口でそう言いながら、俺は真っ赤に染まる世界を駆け抜ける。一瞬でトラブレのメンバーである鞭使いの女子との距離を詰め、『ヘルズ・ギア』を右斜め下から切り上げた。ここまで掛かった時間、十秒。

　今まさに『ワルキューレ』の調査員を攻撃しようと、鞭を振り上げていたトラブレの女子は、どうやら俺の存在には気づいていなかったようだ。迫りくる黒い残光に、彼女はギョッとする。

　分かりやすく接近したにも関わらず、彼女が俺の存在に気がつかなかったのには理由がある。俺が今身につけているマントは、『フォルス』が空に輝いている時なら、黒い方を表にすると、闇に溶け込むのだ。そうそう上手く溶け込むのかどうか疑問があるかもしれない。俺も最初はそうだった。しかし、どうやらこのマントは『フォルス』の光を受けると、人間の出す気配を吸収するらしい。これが意外と馬鹿に出来ず、このマントのお陰でこちらの間合いに入れたことが何度もあるのだ。ちなみに『クラスタ』が昇っている時は、白い方を表にして着ていると、同じ効果がある。最も、ロボット相手だと効果は無いし、欠片も油断していない人間にも効果が薄いので、過信は禁物だが。

　だが攻撃することに意識が向いていた彼女は、俺が間合いに入れてしまうのを許してしまった。こうなったら、こっちのものだ。俺の『ヘルズ・ギア』の刀身の一撃が、彼女のガラ空きの腋にクリーンヒットする。

「ぁ……んっ！」

　ノースリーブにスカートのツインテールヘアーの彼女は、割と可愛らしい顔を歪める。女性にそんな苦しそうな声を出されると、俺も罪悪感が無い訳ではない。しかし、俺も『ワルキューレ』の一員だ。周りに闘う女性が多いので分かるが、女が相手だからといって手加減すると、逆にこちらがボコボコにされることなどザラである。そして、これは闘い。冷たいことを言うようだが、攻撃は受けた奴が悪い。

　そういう訳で、俺は攻撃の手を休めることなく、続けざまに左斜め上から彼女を斬りつける。そして、さらに回転斬り。攻撃は全てヒットして、彼女は手から鞭をこぼし、痛そうな声をあげて左方向へ吹っ飛んだ。倒れた彼女に、俺は真上から『ヘルズ・ギア』を振り下ろし――

「ぅぉ……がぁっ！」

　気が付けば、何か重い物を横からぶつけられた衝撃を感じ、俺も大きく吹っ飛んだ。それでも手から『ヘルズ・ギア』は離さない。

　打撃を受けた痛みがジンジンと熱くなるのを堪えながら、俺は両手で持った『ヘルズ・ギア』を松葉杖のようにして立ち上がる。少し時間をロスしてしまった。ここまでの時間、二十三秒。

　今俺を吹っ飛ばしたのは、あのいつものロボットだった。今までそこにいなかったのに何故？　と思ったが、理由はすぐに分かる。ロボットの足元に、何やら円形の光が出ている。円の中心には、何やら小さな機械のような物が置かれていた。

　あれはロボット専用のワープ装置……だと俺は思っている。『思っている』というのは、俺もあの装置については、よく知らないからだ。ロボット以外の物が転送されてくるところを見たことがないので、俺に出来るのは、おそらくはロボット専用なのだろうという推測だけである。『ワルキューレ』には無いが、あの装置は突如として現れ、瞬く間に色んな『チーム』に広まった。自然に出来た物なのか、どこの誰が作った物なのかは分からないが、恐らく後者だろう。あんな機械チックな物が、いくら異次元空間と言えとも自然界で勝手に出来るとは思えない。それに、ロボットを所持していない『ワルキューレ』も、その機械が一体何なのか、どういう仕組みになっているのか知らないと後々困るので、調査員を多く動員して探させているが、未だ見つかったという報告は無い。上の方々は、恐らくどっかの『チーム』が作ったこいつを、他の『チーム』に配っているのではないか、という予想の元、調査を進めているらしい。

　だが、その一方で、調査の打ち止めを提案する声もあるそうだ。新入りの俺に発言権は無いが、俺はこっちの意見に賛同している。この装置には不可解な点があるからだ。

　ロボットしか転送出来ないらしいとは言え、この装置は中々便利な道具である。色々な予想が飛び交う中、確定している事が一つだけあると俺は思っていた。二年程前に起きた、俺が襲われた『研修所』での事件の事だ。あの時、何もない所から突然あの黒いロボットが二体も出現した。俺は長いこと、そのトリックについて考えてきたが、あの装置を見た時、これであの現象は全て説明がつくのでは無いかと考えたのだ。で、お姉様と木藤さんに俺のこの予想を話してみた所、実は既に調査をしたそうだ。他の襲われた人の中にその光を見たという人が何人かいたということから、俺は自分の予想が、ほぼ間違っていないと見ている。ということは、あの装置は地球でも、問題なく転送装置としての役割を果たせるということになる。

だがそうなると、あの装置が他の『チーム』に行き渡っているのは、どうにもおかしい。自然に出来たものではないので、恐らくは人工物なのだろうが、あんな便利な物を他の『チーム』に配るなど、はっきり言って自殺行為だ。ちょっと鍛えるなり対策するなりすれば楽にスクラップに出来るロボットとは違う。小さくて目立たないあの装置は、奇襲するにはもってこいだろう。事実、俺もさっき攻撃を受けた。開発したのが俺なら、間違いなく自分達だけで使う。

にも関わらず配っているということは、この装置を配った奴らは他にも何か目的があって、この装置は本来の目的から目を逸らすためのカモフラージュなのでは無いかと俺は思っていた。

「はぇあっ！」

　ヨロヨロと立ち上がった俺に間髪を容れず、さっき俺が止めを刺そうとしたトラブレの鞭使いは、俺に鞭を振るう。シュッと空を斬るような音の刹那、鞭の先端の、何か鋭い鉄っぽい物が俺の左頬を掠める。ツーンとした焼けるような熱の温度と、液体の流れる感触。続けて、同じ感覚が俺の右の上腕を襲う。

「にゃ……にゃろぅ……」

　流石に三発目を貰うのはごめんだったが、しなる皮は既に俺の目の前まで着ていた。刀が重いのが、この時ばかりは憎たらしい。鞭の一撃を『ヘルズ・ギア』で弾くこともできず、俺は攻撃の衝撃を額に感じた。

　痛みに思わず目を閉じる俺だが、すぐに気合で目を見開く。戦闘中に目を閉じるなど、言語道断である。

　だが今の一瞬で、トラブレの鞭使いは、俺の赤い世界から姿を消していた。どこへいったとキョロキョロ探す俺だが、前方に迫っていたロボットが右腕を振り上げているのを放っておくわけにもいかない。俺は大きく後ろに退いて、振り下ろされる腕の攻撃を躱す。腕は地面に突き刺さり、ロボットはその場でピタッと動きを止めた。ロボットのＡＩがそういう行動にさせるのかは分からないが、こうなれば攻撃し放題である。

故に俺は前に一歩踏み出し、両手で持った『ヘルズ・ギア』を『ヘヴンズ・ギア』に持ち替えようとしたのだが、すぐさまロボットの後ろから何か薄っぺらい皮のようなものが、右上から大きく弧を描いて飛んでくる。先端に鉄のような物が付いているところを見ると、さっきまで戦っていた、トラブレの女子が使っていた鞭だろう。姿を消したと思ったら、ロボットの後ろにいたらしい。こっちから姿は見えないので、当然相手からも俺のことは見えていないはずなのだが、鞭の攻撃は正確に俺の額に、まるで蛇が噛み付いてくるかのような感じで向かってきた。

「うぉっと！」

　そんな声を上げながら、俺は仰け反る。攻撃は顔面スレスレを通り過ぎた。

　ヒヤッとしたのも束の間、続けざまにロボットが動き出す。後方から鞭の先端が引っ張られ、俺の方に向かってくるのを何とか躱す中、ロボットは今度は右腕を振り上げた。

「せぇえあっ！」

　再び、ロボットの後ろから鞭が襲ってくる。中々対処するのが面倒な攻撃方法だ。ロボットの攻撃直後の拘束時間に、あの女子は後ろから鞭を振るう。鞭を振って戻し、再び振るまでの間に、ロボットは動き出し、腕による攻撃を繰り出す。結果、こちらに攻撃させる隙を作らせない。

　いやらしいのは、鞭による攻撃が『振る時』と『戻す時』で二回あることだろう。特に『戻す時』の攻撃が困る。どうしても、後方に注意する必要があるからだ。下手をすると、後方から来る鉄のような物の一撃が頭に当たり、絶命しかねない。まだ一本だからいいが、これが鞭の先端から二本、三本、あるいはそれ以上に分裂していたら、俺は今頃死んでいただろう。安物なのかどうなのかは知らないが、あんな鞭で良かった。

　せめてロボットか鞭か、どちらか一方だけでも、ほんの一瞬だけでいいから攻撃が止まってくれれば、その隙にもう片方も倒せるのだが……さて、どうしたものか。もう時間も一分経っているし、そろそろケリをつけないとまずい。

　飛んでくる攻撃を左右に必死に動いて避けながら、俺は懸命に頭を回転させる。

「くっ……このぉっ……当たれぇっ！」

　不意にそんな声が、ロボットの後ろから聞こえた。察するに、あのトラブレの鞭使いの声だろう。かなり苛立っている様子だ。攻撃が中々当たらなくて、焦っているのだろう。しめた。相変わらずロボットとのコンビネーション攻撃は見事だが、このまま避け続けていれば、いつかは連携が崩れる時が来そうだ。

　そう思った俺は、腰を据える。回避するなら、それ以外のことは考えない。時間だけが気がかりだが、それは相手がさっさとミスしてくれるのを祈るしかない。カラコンも取ってしまえば、完全に戦闘モードから脱せて『一分三十秒』という時間制限も気にする必用は無いのだが、今俺の頬には血が流れているはずで、万が一のことを考えると取りづらかった。このまま頑張るしか無いだろう。

　僅かな隙も絶対に見逃すものか。そう思った時だ。

「うぉおっりゃっ！」

　俺のすぐ後ろから、ロボットに向かって誰かが突っ込む。レイだった。斧槍をおおきく振りかぶって、垂直にロボットの体に突き立てる。

「ふっふっふっ、レイちゃん参上！　ロラン、助けに来たよ！」

「お……おぅ」

　そのまま俺に向かって親指を上げて見せるレイだが、戦闘中によそ見はヤバイ。大きく弧を描いて襲ってくる鞭は、明らかに俺を狙っているが、ロボットは未だ突き立てられている斧槍を気にする様子もなく、レイに向かって左腕を振り上げていた。

　その後レイがどうなったのか、俺は知らない。

　レイに向かってロボットが右腕を振り上げた時、ふと、俺の赤い世界に入り込んだ奴がいた。そいつは少し遠くにいるので、目の前に戦うべき敵がいれば、普段なら俺も気にしない。こっちに向かって来ているのなら話は別だが。

　だが、そいつはただ俺達の方を見ているだけだった。何かをする様子は無い。

　にも関わらず、俺はそいつを見た瞬間、体に電流が駆け巡ったのを、はっきりと感じた。

「レイ……ここ頼む」

　自分でそう呟いたのが、幻聴のように頭の中に響く。誰かが何か声を上げるのは分かったが、それが気になった時には、もう俺は足を前に踏み出していた。あっという間に、俺の視界の境界上が歪んで、みるみる内に後方へと消えていく。ただ一つ、焦点の当たっている所だけは除いて。

　不意に出た言葉さえ置き去りにして、俺はそいつ元へと加速する。

　俺達の方を向いていた奴は、中性的な顔をしていた。年齢も知らない。にも関わらず、俺はそいつを男で、自分と同い年だと断定できる。

　視界は真っ赤なので、俺はそいつが自分と似たような髪型をしていることは分かるが、髪の色は分からない。にも関わらず、俺はその男の髪の毛がブロンド色だと断定できる。

　俺はそいつのことをよくは知らないはずだ。にも関わらず、俺はそいつが『ワルキューレ』には絶対に所属していないと断定できる。

「おまぇ……どぅし、て……？」

　男は少し後ずさり、顔を歪まる。つっかえながらも、そう呟くのがはっきりと俺の耳に届いた。

「どうして？」

　息を切らせながら、俺は男に一歩詰め寄り、聞き返す。

「そりゃ、こっちの台詞だな。何でここにいるんだ？　答えろよ」

　引きずってきた『ヘルズ・ギア』を両手で構えた俺は、首を傾げた。返事は無い。俺の奥歯が、ギリッと音を立てた。

「どうした……答えろ……」

　だが、そんな俺の言葉に、まだそいつは答えない。だが、歪んだ顔を元に戻し、ギュッと目を閉じて、拳を顔の前まで上げた。握られているのは、刺付きのカイザーナックル。

　カッと目を開くと、男は俺の後ろの方に目を走らせていた。

「彼女は……いいのか？　置いてきたみたいだけどよ……助けに行ったほうがいいんじゃねーのか？」

　さっきまでの動揺は何処へやら、そいつは落ち着いてそう俺に聞いた。

　でも、質問しているのは俺だ。

「俺の質問に……早く答えろよ。なんで、お前が、ここにいる？」

「彼女を助けにいくなら、早く行けよ。俺は邪魔するつもりは無――」

「いいからさっさと答えろ！　闘悟！」

　名を名乗った訳でもないのに、俺は、今目の前にいる男の名を知っている。かつて『研修所』で親友だった『２５番』、いや、闘悟だ。もう二年以上も会っていないにも関わらず、俺にはそう断定できた。

　だが、そう叫んだ俺は、即座に頭を振った。今、こいつの名前は闘悟じゃない。別の名前のはずだ。

　今、自分がどんな顔をしているのか分からない。でもきっと、ひどい顔をしているんだと思う。

　何故なら、俺はこの時悟ってしまったからだ。彼が答えるまでもなく、今ここにいる理由は一つしか考えられなかったのだ。

　そう――

　こいつの所属している『チーム』が、『トラース・ブレイカー』だということを。